

御岳山・『絵の裏』のタイ政治

プラパート・ピントプテー

『絵の裏』（原題：Kang Lang Part）はタイで最もよく知られた文学作品のひとつである。非凡な作家シーブラパー（本名はクラブ・サイプラディットという）の作品である。シーブラパーは一九三二年のタイの政治改革からサリット・タナラット元帥率いる独裁政権の時代を通じてつねに卓越した知識人であった。作品中、とりわけ印象深く記憶に残るのは、美しい清流とその向う屹立する御岳山の情景である。作品は日刊紙「ブラチャチャート」の連載小説として、一九三六年一二月八日に掲載が開始された。のちに、単行書として出版され、以後四〇回以上にわたり出版された。たびたび映画化、テレビドラマ化、舞台化されたことは言うまでもない。ジャーナリスト時代（シーブラパーは新聞の編集の仕事に就いていた）、朝日新聞の招きで日本に滞在し、早稲田大学に席を置いたことがある。その折の、御岳山への旅行が、後日、忘れることができない作品を生み出すための劇的なインスピレーションを与えることにな

る。

私は、アジア経済研究所の海外客員研究員として来日したのを機会に、シーブラパーの足跡を御岳山に訪ねた。昨年一二月の初旬のことである。タイ社会を描いた不朽の名作を生み出す靈感を得た場所とはどのようなところだろう、と心がおどった。晩秋の溪谷は鮮やかな黄色や紅の紅葉で彩られていた。壮大な自然と信じられないほどの静寂さは畏怖の念を感じさせるほどで幻想の世界に迷い込んだような錯覚を覚えたものだ。

小説『絵の裏』という傑出した作品で社会派作家シーブラパーは、一九三三年の政治改革前後のタイ社会における政治状況を赤裸々に描いている。独裁政権下にあつてはあからさまな政治批判が厳しく禁じられていたが、作品は明確なメッセージを発し続けてきた。当時、政権批判が小説や演劇のなかでそれとはなしに表明されることは常道となっていた。しかし、サリット元帥政権になつてからはタイの音楽も御法度になつてしまつた。

シーブラパーは彼の仲間達と一緒に一九五二年



小野沢正喜、小野沢ニツタヤーによる共訳。九州大学出版会刊

一月一日、拘束された。社会の秩序を乱したとして「騒擾罪」に問われたのだ。彼らに関して「平和運動」と呼ばれる活動は農民達に必要な支援を与え、社会の安寧を追求することを目指していた。彼は五年の禁固刑に処せられ、一九五七年に釈放された。独裁政権は国家主義者の大がかりな追放を行ったが、シーブラパーも中国へと難を逃れた。以後、一九七四年に他界するまで故国タイに帰ることはなかったのである。

『絵の裏』は海外の大学で学位を得た男性と既婚の女性―彼女もその夫も王家の血筋を引く高家の人々であった―とのただならぬ恋をモチーフにしている。そこで図式化されるのは前王政時代の遺産として引き継がれるタイ社会における不公平な現実である。この概念はシーブラパーの多くの作品に通底している。

彼が御岳山の溪流で象徴したかったのは真実・永遠の愛ではなく社会の不平等性だったと言える。彼がとりあげるテーマは今日の政治的な諸問題―富裕層と農民、規範の二重性、社会の不正さなど―にも大いに共通している。

東南アジア諸国の政治体制の性格についておしなべていえることは民主主義といっても形式ばかりで実体が伴っていないということだ。政治の実権、経済活動の果実のほとんどは上流階級が享受している。そして状況は、シーブラパーがその小説で描いてきた時代よりも

さらに複雑化している。東南アジア地域で民主的な統治は絵に描くことはできるが、現実に眼を向けると真

の民主主義は存在しないのだ。

タイでは社会運動が広汎かつ活発に繰り返されてきた。参加者は政治の力を中央集権から自分たちの手に取り戻し、代表制民主主義を通じて真の参加型民主主義が実現するよう制度や手続きの変革を求めている。その結果として政治や公共政策への国民の関与の度合いは意味があるほどに強まった。このような運動は地域内の積極的、かつ強固な社会ネットワークの活動が欠かせない。

シーブラパーがその小説で訴えかけてきた主張を、確実に現実のものとするために今後も努力を続けていかねばならない。



晩秋の御兵山（著者撮影）

